

「奈良の都」90他全編にルビ多い。

朝日 48.5.16

小町87
お初の本
橋本
5/100E2

平城京の冒頭
⑤ 1363-1/4

5237-2/2

百科 26-40C
藤原京も 宇内に含め
ある。

大 かいどう
街道

天のき
改行

1,362 P-1/5

藤原京・藤原宮

奈良盆地の南部域に営まれた

藤原京（六九四～七一〇）を

対照図（参照）
同第26回へ藤原京・平城京比較

藤原京は、いつか定かでないが、

「現在考えられている」平城京を1の規模

にまでも拡大されたようである。

藤原京域について、最初に多くの支持を得

た説を発表したのは、岸俊男氏（京都大

教授、古代史）であった。

一九六六年の発掘で分かった藤原宮の位置

を基準に、下つ道など古代の幹線街道を四

辺とする東西二・一時、南北三・二時の区域

を設定した。

一九七九年に、岸説の京域の外で

古代の街路創構が出土。その後と京外

で基盤目状の街路跡が見つかり、岸説では説

明しき小くなつた。

そこで登場したのが大藤原京説である。

H18.2.22
宮城道雄の
袋中にある。

続紀(白) 1-46
15237-3/2同文

1362-2/5

軸 H169.11件で南端
手確認 20回

朝日 H8.7.27 宮城道雄の袋中にある
市町村誌 149

その代表的なものか「十六坊十八条説」
あった。

3 一 一九九六年(平成八年)奈良

県橿原市の土橋遺跡で、西京極と

坊大路跡が出土し、さらに、東端(東

京極)に当たる東十坊大路跡も発見された。

・こうして藤原京は、東西五・三

とが確定した。

・南北は確定していないが、このまでの出土

遺構などからみれば、少なくとも四・七七

あるとみられている。

・このをもとに計算すると、藤原京の面積は

二十五・三平方

平方(キ)を上まわる。

藤原京は、続日本紀などに「京城の拡大」

を示唆する記事があり、考古学上からも大規模

な都城だったことが実証された、という。

日新聞 平成八年五月十六日付、同年七月二十

七日付 続日本紀 第一分冊 林陸朗

現代思潮社 四六頁 末尾の一九頁注六参照

藤原京についてはまだ調査中

南北方向が未確認で

文武天皇 慶雲元年(七〇四)十月二十日条

資料 26-404P

中央部
主要部
中枢部

1362P-3/5

「長安から平城へ」23
大極殿は朝堂院に収められ、
次頁の図

210mm = 7
32mm 100m

あり、この物語の各図にありては従来考え
られていた通り、図示しておきたい。
*
なお、一九三四年以降の発掘調査により、
藤原宮の朝堂院は南北約六一六、東西約二
三七の広さを持ち、平城宮・平安宮の朝堂
院よりもずっと雄大な規模である事実が認め
られた。
(1) 朝堂院「北」の一郭は、正面七間、側面四間
の大極殿を中心とし、その東と西と北に一殿
そのまわりに回廊を連ね、回廊
すつを配し、廊で連絡し、南廊に正門を開い
ている。
朝堂院「中」
(2) の一郭は、東西に対称的に配置された正
面九間、側面十五間、側面四間の十二堂と、
それらを囲む回廊と、南面に開く中門から成
る。
(3) 朝堂院「南」の一郭は、正面十五間、側面四間の東。
西朝集殿と、それらを囲む回廊と、南門から
成るものであることが確かめられた。
また、この発掘によつて、多数の瓦をばい

版では

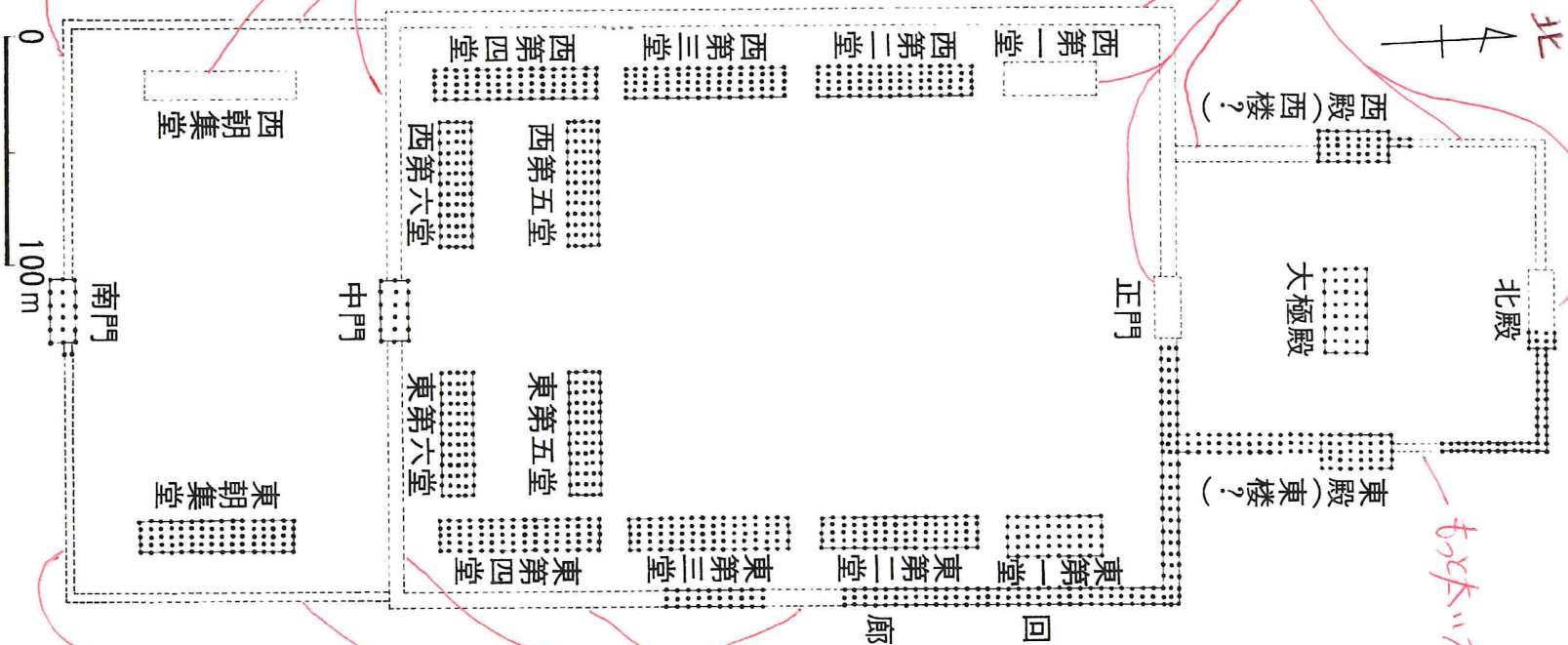
④ 4089°
⑤ 5235°

1362^P - 4/5

※ この図を、頁の左半分
(もしくは右半分)に掲載
して下さい。

未発掘を示す
薄い点線が
はきり見えるように
御注意下さい。

ちと太い破線



ちと太い破線

ちと太い破線

680

第252図 藤原宮朝堂院跡の平面図

(「世界大百科事典」平凡社〈藤原京〉参照)

百科事典 26-404°

H30(2018)3.16(4) ~ 3.18(4回)

IF

1,362^P-5/5

百科26-k04^P
2/12/15^P

成果をあげたという。(「世界大百科事典」
の2006年版、土器、柱根、木片類などか出土し、古瓦
の編年上の一つの基準を与えるなど、大きな
成果をあげたという。)

△藤原京✓参照

*

⑤1364-1/2同文

大和盆地(大和盆地)
とある

P 1/4
1,363-1/4

やまきと地名辞 ⑤158° ⑥168°-1/2
柳本 1591P ⑤230P
②③①とはのこと! 注意! 聖徳太子 田村円澄 4P (紀下403頁24行にある)
にかいどう地名辞
二階堂 1175P
とき
土佐川 1074P
⑤170°-1/2
⑥260°-3/5

平城京
奈良盆地の北端に営まれた平城京の
大局的な構想について、考察してみた。(以下、巻
頭の第20図当初の平城京構想。同第26図(藤原京・平城京比較対照図)参照)
そもそも、奈良盆地(大和盆地)には、古
くから南北に通ずる三つの道が存在していた。
(1) 二階堂―田原本―八木―軽―檜前―土佐を
経て、吉野へ通じる下つ道(吉野大道)
(2) 奈良―石上―柳本―三輪―桜井をつなぐ
上つ道(長谷大道)
(3) 下つ道と上つ道の間をはさる中つ道
の三道(大和三道)があったというのである。
そして、大和盆地を南北に通ずるこの三道は、聖
徳太子によって造られた。
といわれている。(「聖徳太子」田村圓澄、中公新書
四頁参照)
また、
下つ道・中つ道・上つ道
ツ道の三本の道は、七世紀の初めころ設けら
れた。

あたりまえ
当然 43P

HU

$$1.363^P = \frac{2}{4}$$

かんどう
官道 二の頁
1行

(1) 運河
南から北へと配した

小井 歩
里三
交歩

$$\frac{525 \text{ m/里}}{4 \sqrt{2100 \text{ m}}} = 0.2916 \text{ m/尺}$$

$$= 29 \text{ cm/尺}$$

$$502^P \div 1364^P = 20^P$$

$$大電 和
里 = 3.9273 \div 4 \text{ km}$$

$$20 \div 143$$

$$115$$

小た官道で、四里(二・一)時
地を南北に直走する

という。(「奈良」直木孝次郎、吉川弘文館
二一六頁参照)

つまり、

へ七世紀の初めごろ、奈良盆地の南から北へ二・一
時間隔で平行状態を保ったまま真直ぐ続く

つの大道は、
「国の事業」として作ら

れた
(大和三道)
七世紀の初めごろ

と解される。

も
もちろん極めて当然ながら

へ同一間隔を保ったまま打ち続くこの三本
の大道は、大和三道が、何の意味もな

く何ら目的とするところもなく作られた

さて、極めて当然のことながら、

何の意味もなく何ら目的とするところ

も無く、同一間隔を保って打ち続く三

本の大道は、大和三道が造られた

などとは、とうてい考えられない

では、聖徳太子は、一体どのような意図の

主かく 575
企画 計画と73
こと

ではじめ 手始 1533

こうちく 750 造成 (つくりあげること) 宅地一
P そうせい 1290
P 230

1.363 P-3/4

赤駒の 万4-375
はらばらう田中きよに ② 北のちろ 石原

もとに、これらの「三道」を立案され、造成

されたのであろうか。

すでに述べたように、聖徳太子は、

奈良盆地北端の地に、壮大な都城を現出

させようと企画され、その手始めと

して、先ずありあかしく、こしら三道の構築に着

手されたのであろう。

述) と思われ。 (「荒筋」の第三編において既

も、ともその当時、奈良盆地北部地域は、

広漠とした湿地帯であつた。

そこで、この遠大な都城築造の理想を実現

させる足掛りとする為、

上つ道、中つ道、下つ道の三つ

の大道が、奈良盆地の南部地域から北へ向かう

て、ただただ真直ぐ真直ぐ作られてゆき、

さらに、北部地域の大湿原の只中を突っ切る

ように、北方へ延長されていった。

このと推察される。(第一表参照)

「水鳥の多集く水沼」(万十九

四二六一)を埋め立て、ここに一大都城

「て」願末 (こ) 大蛇 一朝一夕にはでえない

二
 一
 う
 ニ
 と
 は、
 夫
 い
 へ
 人
 存
 難
 事
 業
 で
 あ

「官道」同文
①363-3/4
奈良 216'
①5243
①363-3/4

主母元
規模547
①5243に
同文 ①365-3/4
1364
P 42x9.7m
P 42x9.7m

「奈良」216'
小町87' 当座の
赤26m
奈良の都 89'
長安から平城へ 27'

1570

当初の平城京の構想

1473
247

現時点では、通常、

(1) 下つ道は、朱雀大路に連なり、

(2) 中つ道は、平城京南面東端の四坊大路

に連なり、

(3) 上つ道は、平城京東北部が東方へ張り

出した外京の七坊大路からさらに東方へ

一坊ばかり山奥へ入った地点に続いてい

た、

同第26図へ藤原京・平城京比較対照図参照

と考えられている。(以下、巻頭の第20図へ当初の平城京構想

また、平城京の規模について、

「平城京(南端部)の東西は約四・二

南北は約四・七時であつた

という。(「奈良の都」虎尾俊哉、講談社、

八九頁参照)

また、より詳しく、こう解説されている。

「下つ道と中つ道、さらにその東を走る上

ツ道の三本の道は、七世紀の初めごろ設けら

れた官道で、四里(二・一里)間隔で奈良盆

①363-2/4 4.1km
大和、東西約4.3km
南北約4.8km
218'
218'

起案 511 創案 1281

1,365^P - 1/2

5244^P 同天

1363^P 1/4 主 改行

1363^P - 3/4 2行

地を南北に直走する。藤原京と平城京の設定は、下ツ道と中ツ道を利用して行なわれた。平城京はこの二本の古道を通じ、藤原京と密接な関係をもつて造営されたのである。云々という。へ、奈良、直木孝次郎、吉川弘文館、一六頁参照。平城京の南端部、東西方向の半分である。下ツ道、中ツ道、上ツ道、間は二・一キロ。下ツ道、上ツ道、間は四・二キロであった、という。

こうしたことから推して、あえていえる、へ平城京起案の段階においては、奈良盆地北端一帯に、東西約八・四時におよぶ、まさに宏大な都城建設が予定されていたのはなからうか。

と想像される。

七世紀の初めころ、聖徳太子は、奈良盆地を南北に縦走する三本の大道築造の構想を打ち出された。その当初には、一帯の奈良盆地北端の地に、東西約八・四時の

奈陽の都 89° 令和元(2019)5.27(月) ~ 5.28(3日)

③ 1364° ④ 5244° F 5/28 5/28

1.365° - 3/2

昔魏の1里=434m 北魏の1里=不明 415m
434m x 20里 ④ 5243° x 20里
= 8.68 Km (大きすぎる。ヤマ) 8300 m

洛陽から2103° 1里=300歩 1歩=6尺 1尺=23.04cm(後漢)
300 x 6 x 23.04 = 41472 cm = 414.72 m

ように推察される。

米

③ 1364° 13~14°

京を築いた。へ東西約四・二^時、南北約四・七^時の平城
うこで止むなく大幅に縮小し
南北一五里の洛陽城と同規模の都を置くこと
は出来得たとしても、どうも窮屈すぎ
る。かし、奈良盆地北端部は、東西二十里・
五^時をもつて計算するとハ・三^時となり、
の二倍であるハ・四^時という数字に極めて近
い。巻頭の第11・20図で「漢和辞典」小林信明、小学
館 末尾の「歴代度量衡変遷表」へ「度量衡名称」参照
北参照。既述。この東西二十里は、漢時代の一里リ四一
五^時をもつて計算するとハ・三^時となり、
の二倍であるハ・四^時という数字に極めて近
い。巻頭の第11・20図で「漢和辞典」小林信明、小学
館 末尾の「歴代度量衡変遷表」へ「度量衡名称」参照

米

藤原京型だった平安京

龍が正し。



瀧浪貞子氏

（京都女子大学講師・日本古代史）

は、日本の宮都の平面構成について、次のように述べている。（添付の新聞記事参照）

平城京には、いわゆる門号氏族の名にちなむ十二門があった。

九世紀の初めに、壬生氏門は美福門、佐伯氏門は藻壁門というように巧みに唐風の呼称へ改められた。

しかし平安京の場合、宮城門はその他にも

二門（上東門・上西門）がある。この二門は、他とち

が、土門であったことから東・西土御門とも呼ばれ、他の宮城十二門とは別個の扱いがな

された。これは上東・上西二門が伝統的

な十二門よりあとに造られたからであろう。

そういふ疑問を抱いていた時に出合ったの

が、山槐記（中山忠親の日記）平安時代末期の長寛二年

（一一四）六月二十七日条の記事である。その内容は

「いま（平安末期）の土御門（大路）は、もとは一条

大路であり、それを昔、二丁（町）北へ上

げ、その結果（二丁分が）宮中・京中に取り

（一）

（二）

（三）

（四）

新聞記事

赤い線や、字をきくにはおいて下さい。
黒い線を、金で下す。 ↓ 紙の黄色を減らす。

古代史の分野で最近話題を集めたものに、わが国の都城のルーツについて中国国境研究者の討論があったが、意見の一致をみるまでには至りなかつた。むしろ、いつした議論には、わが国の都城についての基礎的データが不足している。わが国に限らず、また明の時代に点かっている。都城の構造を

藤原京型だった平安京

・顔の厚さ、
⑤ 1367² - 3/3 に寸
・力7-



瀧浪 貞子

代史)

(京都女子大学講師・日本古

提供のNOVAはNOVA。

政治史の理解にも新たな視点

の留意が必要となつて、平安

発掘調査も、今後はそのあたり

なにか。平城京や長岡京などの

老瞿 してんたム かのては

國の都或は基本約ては藤京京型

[illegible]

此二以前の第一次第安京の繁華

日知錄卷之四
 四庫全書

宋才才大體道矣；○以金曰

第百一十回

△ 金の細工の類は、

少 屋根はわいへの基壇むね

群之物資を運搬せり

遣られた上東・上西門は、倉庫

れた。それで拡大された区域に

域内に取り込まれ尤上で整備を

つた大蔵省の倉庫群は、大内裏

その結果、一般官衙域の外にあり

にあらざるを以て其の非を論ず。

「元慶宣旨の制」

(A) 1910 1494 1910 1910
 (B) 1910 1910 1910 1910

卷之八
 卷之八

國史館藏

用、酒、茶、(口舌) 才、の、心、三、

(※^{おのれ}のすが、拡大コピーして読んで下さい) ↑

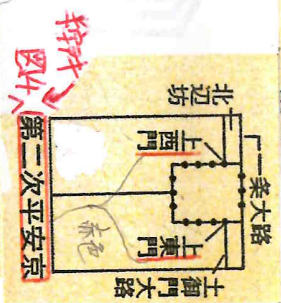
↑色の白さを。色白の顔にしたい。

編のミミに下され。・次々原のから写真と差し替えて下され。

・カー
・左頭右側粉、上F
限一杯は出17
掲載下211。
・前頁と揃えて下211。

「この行を垂直に」下の字、列とあわせて
おいて下さい。

図・大内圖などの描圖(さし)の称も生まれたが「土門」とは
ら東・西土銅門(つちかみど)の
場合、鎌倉期に描かれた京中
ずが伝承されていて明らかで
ある。この描圖は、それ以前
の京都跡親の手掛かりともされ
る。土門よりあとに造られたから
土門(上土門・上西門)あり、他
の場食、宮城門はその他にも二
称に改めている。しかし平安京
門というように巧みに曹鳳の呼
を義禰門、佐伯(氏)門を藤原
世紀の初めには、壬佐(氏)門
これは平安京にも隣置され、九
族の名にちなむ土門があり
平城京では、いわゆる門号氏
の



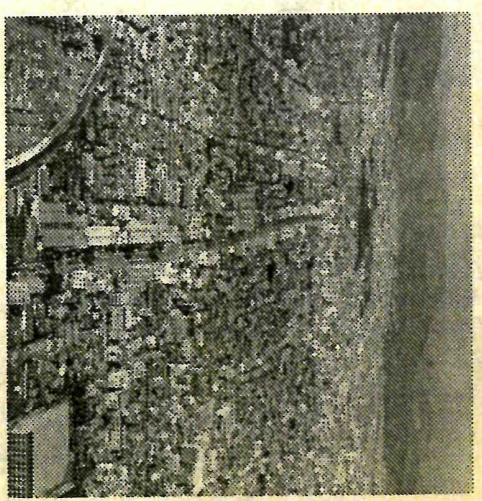
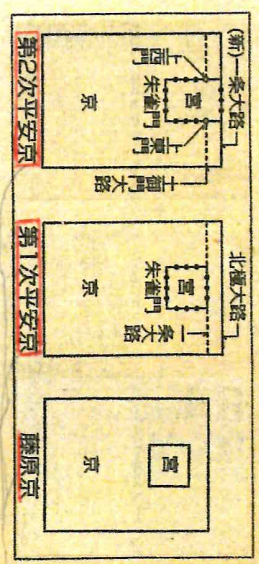
新 図4
新 図4
新 図4

赤い線にすく
主いなる線に
17下211。
*黒い線も
H14

朝日新聞 平成6年(1994)4月30日(土)夕刊

瀧浪教授の第一次平安京存在説

中山忠親の日記『山槐記』をはじめ、平安時
代の文献をもとに考えると、桓武天皇が造りは
じめたころの平安京の宮城の北側に、藤原京
と同様に京域があった。その時期の平安京を
「第一次平安京」と呼ぶ。その後、宮城が拡大
されて北側の京域も宮城内に取り込んだ段階を
「第二次平安京」と名付ける(下図)。



南側から見た平安京跡中心部。上方が宮城で、中
央の道路付近に朱雀大路があった(京都府内)

アサ-ライ
H14
赤い線にすく
主いなる線に
17下211。

・カラー

・右の写真から、丸く切り取り

下さい。

・前2頁の白黒写真と差し替えて下さい。



692

1,367^P-3/3

【例】



・2ヶ所を「黒く」して下さい。

さだこ)

瀧

19

学

現在

博士。

良・平安時代)

京都女

士課程修

誉教授。

代史 (飛鳥

北浦定政 手持ちの図
名には些い

日本の都 新南の板30巻
中に在る。 1,368^P

次頁7行
第一系大内裏

財の宮城切抜袋内に在る
④1364年平城京構地図

天つき
改行

込まれた」というものである。

この「山槐記」の記事は、結論を先にいえる
は、事実であつた。

つまり、東・西土御門（上東門・上西門）
は、宮城の北辺に沿つていた。一条大路を

北へもつていき、そして宮城部分の大内裏が北
へ拡大されたのにもなり、旧一条大路に開

く宮城門として、新しく造られたものであつた。

そこで私は、一条大路の北上以前を第一次
平安京（大内裏）、以後を第二次平安京（大

内裏）と呼ぶことにしたい。（図3・4参照）

なお、第一次平安京（図3）は第二次平安京（図4）
と同様の構造ではなく、（京城が大内裏をとり囲んだ）

藤原京タイプ（図1）であつた。平城京（図2）は

牙に松林宮（苑）があつた。知られ

は藤原京型であつた可能性が大きいと思う。

江戸末期の北浦定政は平城京を藤原京型と考

えて復原図をつくつていたが、あらためてそ

ういう観兵から検討する必要があるのである。

新聞切抜「都」の袋内。
地元のからマール
おもしろ味がある。
HL (載せてはいいが！)

新聞では「改編」

1,369^P - 1/3

新聞切抜
「都」の袋中にある。

が主といふ
組し「都」212^Pに「入ける」といふ
2950^P

かろうか。
次に一条大路北上(そーて宮城郡分の拡大の
時期は、土御門(土御門大路)という名称が初めて登場
する時期を調べることで、あつたのすから推定さ
れるが、結論のみを言えば、それは九世紀末
元慶年間のことであつた。
その結果、一般官衙域(第一次大内裏)の北にあ
つた大蔵省の倉庫群を取り込むようにして大
内裏が拡張されたのたつた。そーて拡大さ
た区域への通用門として作られた上東・上西
門は、倉庫群へ物資を運搬しやすいように
屋根はもとより基壇もない。他の宮門と違
う、わねわねが普通通知、ていする平安京の平面構
成が、じつは九世紀末に改変されたものであ
り、それ以前の第一次平安京が藤原京型であ
つたとするなら、わが国の都城は基本的には
藤原京型を踏襲していた、と言えるのではなか
らうか。
というである。(「朝日新聞」昭和五八年三
月二十三日付「藤原京型だった平安京」
四月三日付「平安京」建都の姿、熱い論争) 参照

1367
「土御門大路」とある

十一
六
二

元 714^P
同地 = 銀座

聚路在路

平安朝の権力 1189P

1023P

1026P 1154

1023P

1369-3/3

5390P 46

1565P 2/3

2300P 122P

1392P

699P

1392P

洛・下洛

等々と云う(既述)

「荒筋」第一編において既述

もつとも因みに述べると、嵯峨天皇の御世(八の九と八三)

「平安京の東半分(左京・東の京)の正と

を日洛陽の、西半分(右京・西の京)の正と

を日長安と、呼ぶこともあった

という。(「玄秘苑」へ洛陽へ長安へ参照)

・平安時代の人々は、洛陽のみならず、唐の

首都長安にも、深い憧憬の念をもっていたのであろう。

(*)

応天門

前述の通り

先に述べたように、詩経の大雅三、文王元

「都城を囲む城壁には、皋門を立てた

宮室の正門には、応門を立てた

とある。(第十四章へ鑑京・郊郭の王都の構

造について、の項において既述)

平安京の宮城を囲む城壁には、皋門に相当

する朱雀門があり、宮室(朝堂院)の正

(同)原稿122頁には、

161、新刊(1)-106頁下、130(2012)3、18

小町、175' F IF

小町176ⁿF

天啓
改行

1,370^P

三子
父小村 386^p
二子 三代実前 181
次女 妙乃 140^p 続紀(縁) 3-147
~~603.10.3^p~~ ~~七~~ 十姉乃 258^p

⑦ 5487- $\frac{2}{3}$

「小町」175P来~

「天門
長安か平安城へ」26^P

十三年十月二十一日条参照

面には、「応門」に相当する「応天門」、「朝堂院の正門」があつた。「弘明苑」、「応天門」（参照）
・そして、「応天門」の西そでに「樓鳳樓」、「翔鸞樓」という二つの樓觀（閣）があつたといふ。
う。「日本の歴史」③平安貴族、読売新聞社、七頁参照。
三代実録、清和天皇の貞観八年（三月十四日）糸には、「応天門」の変についで、
「勅、去閏三月十日夜、「応天門」及東西樓觀忽有火災。皆悉灰燼。云々」
と記されてゐる。
と恐らく、
へ周初の頃の「応門」になぞらえて「応天門」と命名し、
後半の様式にならうて樓觀を立てたのだから、
と思ふ。
（双関）
へ平安時代初期の最高権力者たちは、周初の頃からの都城の移り変りを知悉してゐて、
平安宮の朝堂院の正門を、「応天門」と呼んだのであろう。
と想像される。
「三代実録」清和天皇の貞観

ありく
宮城を
取り囲む
城壁には
皇門に
相当する
朱雀門が

大 打 七 折
= 1399 打 五 折 44%

コクヨ ケー20 20×20

1378 399~999
 1226 1681 1568
 22
 「前の日の明」も
 1.372

はれやかな帝都

だ、朝貢の儀式の日を待っばかりだ
 成さねばならない魏国の天子への朝献の
 果した後、日御子がおわします我が祖国へ一日も早く
 帰りた。私は帰って、この一大事業に
 取りかかりたい。
 難升米は胸の内に
 へ名都洛陽城とそっくり同じ規模で築か
 るべき、和馬台国のはれやかな帝都の様子
 を思い描くのだった。

冬至の祭天の儀式
 その準備は前の日の晩から始まった。
 を中国で「冬至夜」と呼ぶのは、除夜に
 ることはである。（「世界大百科事典」平
 社へ冬至参照）
 さて、正午における太陽の高度が一年中で
 最も低く、また昼の長さが一年中で最も短
 い冬至の日は、陽気が初めて動き、君主の

冬至の日は、陽気が初めて動き、君主の

491

1568

861

527

152

1226

282

1170

1170

1170

米

三才(生)I-105 下れ 景初元年 1344 同文 1347 1373 -1/3 1346 水経注 302 2111 1342 -1/3 1430 国を治める方法

治道も長ずる日とされ、天子は、この日南郊の円丘へおもむき、祭天の儀式を行なった。
 (『廣群芳』へ冬至等参照)
 先に八城南突出地区の項で述べたように、水経注、伊水条には、こう述べられている。
 伊水はまた東北に向かい、洛陽県の南にいたて、内丘の東をすぎる。大魏(北魏)が天を郊(祭)したところで、漢の故事にならって建てたのである。曰、後漢書、郊祀志に、建武二年、初、め、郊兆を洛陽城の南七里に制し、円壇八陛、をつくる。中にまた重壇をつくり、天地はその上に位する。みな南面し、その外壇の上を五帝の位となし、その外に壇の垣の低い垣をつくり、重宮はみな紫にして、紫宮に下へ、礼を授け、天子は天皇(毛皮のころも)を着て冕をかぶり、昊天上帝をここに祭るのである。云々
 また、『三国志』魏書、明帝紀には、こう記されている。
 景初元年(二三七)十月二十一日、洛陽の南にある委粟山に円丘を造営した。十二月壬子(十九日)冬至の日に、はじめて祭祀を行なった。云々

←カット

中々

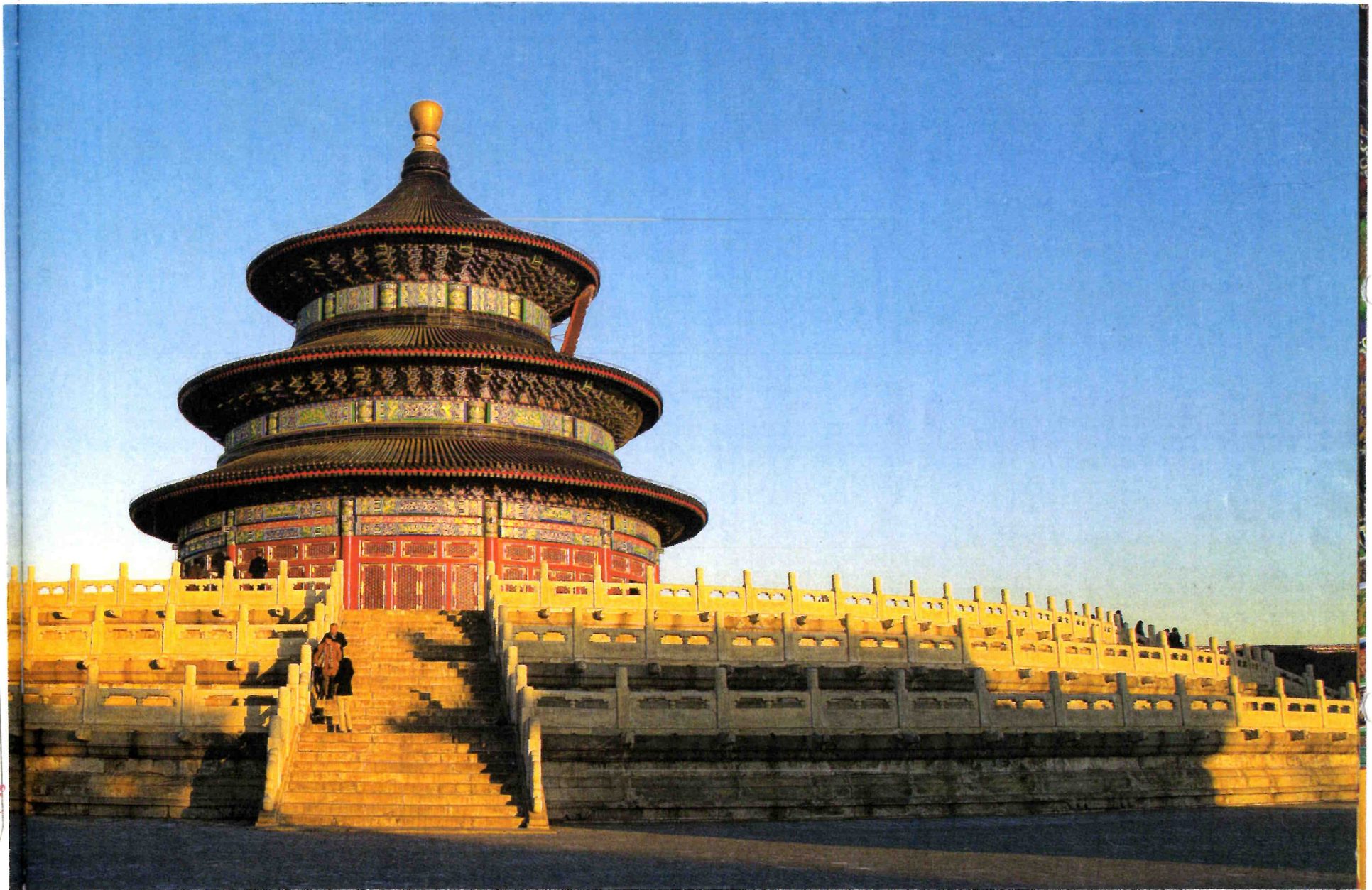
1,373P - 2/3

* 空の色むらも、な~~く~~して下さい。

・カラー
・右頁上半分
左右に開展
一杯はみ
出させて
下さい。

1340
- 3/2

著作権
許諾は、
中国の世界
遺産の文化
財に
結構です。



1344

1424
中々

北京の天壇祈年殿 (側面)

114

天燈鬼・竜燈鬼

『中国の世界遺産』 羅哲文・李敏 エクスナレッジ 2012年6月29日発行 158~19頁参照

『天燈鬼・竜燈鬼』 毎日新聞社 1992年11月30日発行 5頁参照

・円形三段の基壇の上に建つ、笠形円形三層屋根の天を祀る祭壇。円と三にこだわった三笠の大建築。

701P

1344 3/2 16

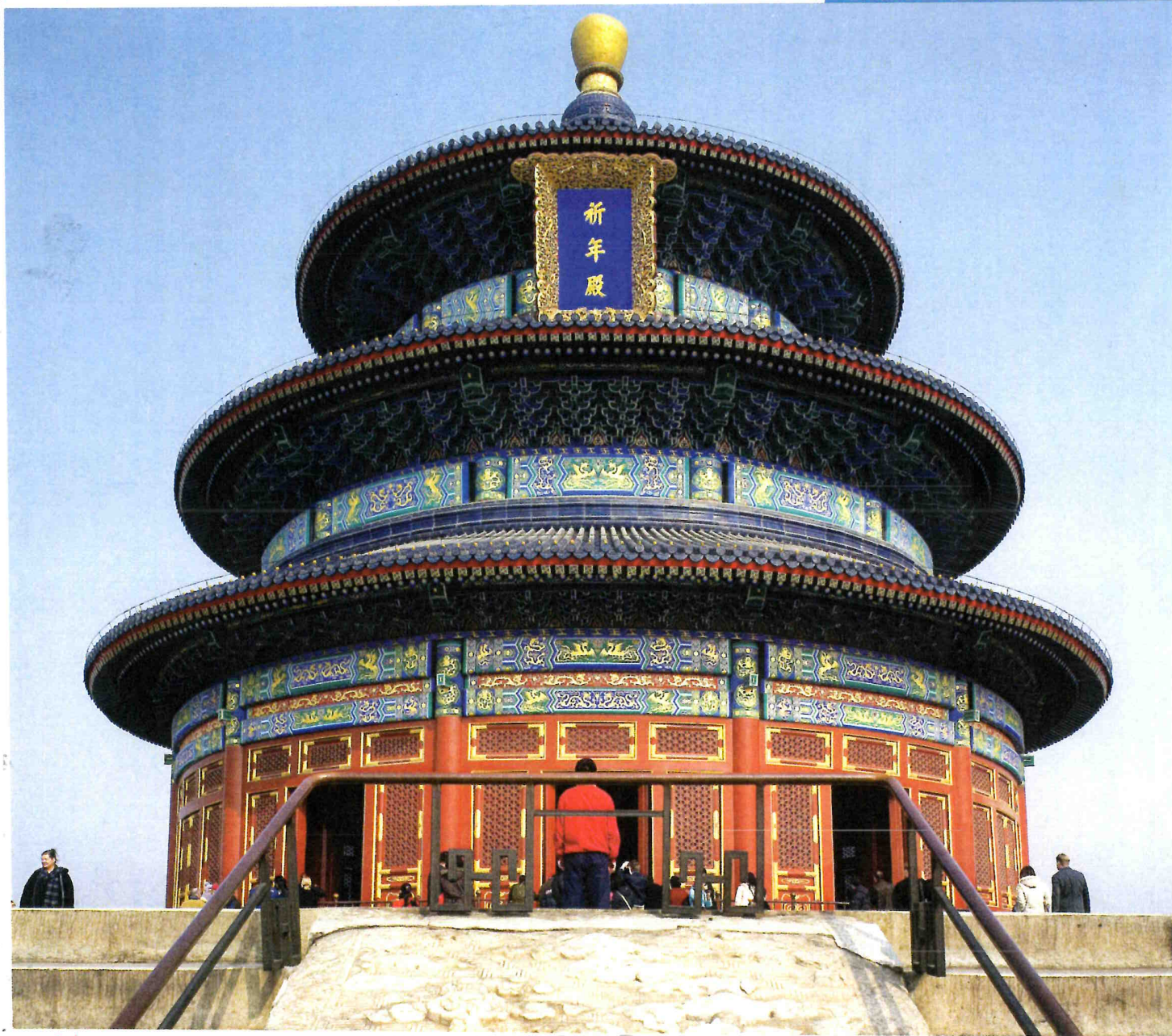
カット ←

1,373^P - 3/3

→ カット

・カラー

・左頁の左上に
載せる。



→ 3人の人物
↑

←

→

132G

142G 写真図版221 北京の天壇祈年殿 (正面)

『中国の世界遺産』羅哲文・李敏、エキスナレッジ、2012年6月29日発行、160頁参照

702^P

118

⑦ 1403ⁿ - 2/

⑧ 2103^p - 2/2

タイム①1124⁷ (2434)

三. 九- (10) 正始4行 安志源 51^P
I- 116 政行 ④ 1128 - 1/2 米

「後漢書」汲古部院①-50'叙

6代口口同 1.375
 1128 38
 1/2 同 4.575

⑤ 1297^p 8~10行
冬至23
朔度

第27の12月の各日の日 = 日天-1-106^P
1,344^Pの三つの層
第28の12月 = 日天-1-115^P 147^P

魏支錢50⁷

(二四三) 条には、

[illegible]

11

小林 491

車庫中解 820⁹
系図

112.10.12 紀下 340^P

1344^P (三) 1376^P (紀上 361) 2216^P 4110^P

1344^P 紀上 360^P 起居注

1344^P 3層あり

三〇英 I-116^P 三〇英 (原又) 1-98^P

とある。 晋書武帝紀には、 泰始二年十一月己卯、倭人來 獻。 二年十一月、倭国の女王倭 遣、正始四年十二月は、冬至を 含む十一月の翌月である。 (第24表 復暦・殷暦・周暦の相互関係) 参照

「冬十二月、倭国女王倭彌呼遣使ヲ奉獻ス」

H17(2006)12.30(土)⑥

H30(2018)3.18(日)~3.19(4回)

H30(2018)12.28(金)~12.29(3回)

令和元(2019)5.28(木)~5.29(3回)

令和元(2019)12.31(火)~令和2年1.2(3回)

1,377

きばん 547 トす 2031

1375 中央
「思われる」

下1/2
リ

*

なるほど 確認はないが、中国では、冬至な
どの祭の後に朝貢の儀式を行うのが通例であ
ったような印象が強い。
そこで、景初三年十二月の倭国からの朝貢
の儀を、冬至の日に南郊の円丘に
て天の神を祭ったその後、倭国から
の朝貢の儀と考えてみたい。
一方倭国では、中国・朝鮮半島からの使者
を朝廷へ招く日に、特に冬至の後など
といった定めはなかったように見受けらる。
あるいは、勅トなどによって吉日がトさ
れたのかも知れないが、詳細なことは分らない。